サイパン政変前後における銃後の民衆意識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川島, 高峰 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/11711

明治大学大学院紀要
第31集　1994．2

サイパン政変前後における銃後の民衆意識

The fall of the Saipan and the Japanese public opinion

博士後期過程　政治学専攻　1990年度入学
川　島　高　峰
TAKANE KAWASHIMA

目次

はじめに
Ⅰ．第３回目の海軍記念日
Ⅱ．北九州爆撃と B29
Ⅲ．サイパン政変
Ⅳ．小磯内閣とサイパン政変後の世論指導
Ⅴ．翼賛と隘路
Ⅵ．決戦輿論指導方策と台湾沖航空戦
むすびにかえて

はじめに

本稿は，太平洋戦争末期の銃後の民衆意識を戦況の推移と共に検討してゆくものである。一昨年度，本誌上で太平洋戦争を銃後の戦意という観点から時期区分したが[1]，本稿が対象とするのは戦争末期（B29による北九州爆撃が行われた1944年６月並びにサイパン失陥に伴い東条内閣が総辞職した７月から敗戦まで）である。ここではこの戦争末期を，B29による東京空襲があった1944年12月を境に前後に分け、その前半期を扱うこととした。というのは，この前半期において本土空襲は北九州地域に限定されていたのに対し，後半期は米軍のマリアナ基地の始動により日本全土が空襲の対象となり，銃後の意識にも変化が生じるからである。

Ⅰ．第３回目の海軍記念日

戦前，５月27日は海軍記念日と称されていた。この日は日露戦争における日本海海戦の勝利を記念する日であり，戦時中は，戦争目的の認識と戦意を高揚させ，銃後の思いを新たにするというの

がこの日の持つ意味であった。しかし，朝日新聞では大東亜戦争開戦以来，三度目目となる海軍記念日を前に，一昨年の海軍記念日を「五月二十二日山本元帥戦死の報が伝えられ，続いて三十日アッツ島の玉砕が発表され」と振り返っており[2]，この日の回顧と展望は決して明るいものではなかった。実際，5月23日，『朝日新聞』掲載の二つの記事は，銃後の不安を増幅するばかりはでく，その後の戦況の展開を暗示するものであった。この日，大本営は「敵機動部隊」が「二十，二十一日の両日に亙り南鳥島を空襲」したと発表した。さらに，この日の記事には「在支米空軍」は，皇軍が「航空施設を粉砕しているにもかゝはらず」,「支那全土にわたって重慶軍を駆使し三百有余の航空基地を設営」し，「わが本土を窺う」態勢にあることが伝えられた。このため，翌日には「南鳥島カ空襲セラレタ際九州モヤラレ関門ノ倉庫ハ焼ケタ」，あるいは「東京方面ノ上空ニ敵機カ現ハレ爆弾ヲ投下遁走シタ」といった双方の記事を混同したような流言が記録されている[3]。既に戦況の推移に悲観的な憶測が先行するようになっていたのである。新聞は現下の海軍の戦況に好材料がないため，盛んに39年前の日本海海戦のことを書いていた。この日，海軍報道部長栗原悦蔵大佐によるラジオ放送[4]が行われる。同大佐は近代戦が「大消耗戦，大補給戦，大生産戦，大科学戦」であり，「勤労こそ勝利の基盤」であり「攻勢移転は銃後」の国民にかかっていると訴えた。しかし，この増産について，国民は「同一の資格において，同一の重要さをもって戦争に参加」しているが「万が一にも西欧流の悪平等に陥るが如きことがあってはならぬ」と，「階級配置，指揮系統」の重要さを強調しなければならなかった。当時，国民の不満は「暴力的騒動の一歩手前まで来ていることが，あらゆる方面において見られる」[5]と書かれていたが，一方，天皇の降伏宣言まで国民は「一歩手前」で踏みどどまった。それは，この放送の言葉を用いれば，「大東亜共栄圏を建設し，延いては全世界に道義的秩序を建設するという使命」と，敵が「日本民族を抹殺せんと必死」であり，「勝利か，滅亡か，二つに一つ」以外に戦争終結はないという認識があったためである。

II．北九州爆撃と B29

6月17日，国民は2つの大本営発表に衝撃を受ける。一つはアメリカ軍が同月15日朝「『サイパン』に上陸を企図」，「今尚激戦中」であるということ，そして，もう一つは16日未明に「B29及び B24二十機内外北九州地方に来襲」という本土空襲の報道であった[6]。実は，アメリカは日本国民への心理的打撃を狙って，空爆作戦をサイパン上陸作戦と同じ日に決行することにしていたのである。アメリカが北九州の空爆作戦を策定したのは1943年11月のことであった。この計画はマッターホーン作戦と呼ばれ，国際的な心理効果，特に「中国人の士気を鼓舞」するという政略的な狙いがあった。中国の成都が発進基地とされたのもこのためであった。本土の攻撃地域は B29の航続距離から北九州地域，中国地方日本海沿岸に限定され，飛行機工業，製鉄工業，港内船舶，市街地，外地ではパレンパン精油所が爆撃目標とされていた[7]。参考までに本稿で述べる期間に行われた主な本土空襲を列記しておく[8]。なお，これらの作戦に参加した B29は約140機（延約500機）であり，31機が未帰還機となった。

6月16日　47機，八幡製鉄（北九州地区）

7月 8日　17機，長崎，佐世保，大村

8月11日　29機，24機が長崎，5機が北九州地区

8月20日　61機，八幡製鉄

8月21日　10機，八幡製鉄

10月10日　艦載機，奄美諸島，沖縄に来襲

10月25日　59機，大村海軍航空廠

11月11日　29機，大村海軍航空廠

11月21日　61機，大牟田，熊本

次にこの6.16空襲について日米双方の作戦の実際，被害の実際，報道の実際，反響の実際の4点について検討してみることにする。

6月15日午後3時，アメリカ陸軍第58爆撃航空団のB29，75機が八幡製鉄を目指し成都基地を離陸した。目標上空に到達できたのは47機で，作戦空域には午前0時30分から3時30分にかけて単機ごとに侵入することとなった。当日は視界が悪く，灯火管制が徹底していたため，目視爆撃が出来たのは15機であり，残りはレーダー爆撃を行った。なお，米軍は6月18日の写真偵察により，今回の空爆が八幡製鉄の製鉄能力に全く影響を与えることが出来なかったことを確認している。これに対し，日本軍は午前0時24分，空襲警報を発令，同1時には，飛行第四戦隊の夜間戦闘機（二式複戦）8機を常時要地上空に配備，空襲警報発令中に延24機が出動し7機撃墜を報告した。また，北九州地域には高射砲が約120門配備されていた。戦後，日本の高射砲は射程距離が6—7,000mしかなく，8,000m以上の高々度で来襲してくるB29には歯が立たなかったということがよく言われたが，この日のB29の侵入高度は2,000～3,000mと極めて低くかった。それにもかかわらず，高射砲部隊は「一般に沈着を失い」，「司令部から再三にわたって乱射に対し各隊に警告したが，容易に沈静」せず，一機も撃墜することが出来なかった。このため，「兵隊ハ平素国民カ金ヲ出シテ養ヒ『イザ』ト謂フ場合ニ備ヘテ遊ハシテアルノニ何ト言フ事タ一機モ撃チ墜シ得ナカツタテハナイカ」（6月19日），「軍ハ平素百発百中敵ハ一歩モ我領土ニ侵入セシメナイ筈ト強カリヲ云ヒ軍ヲ信頼セヨ等ト大言シテ居ルカ一機モ撃墜シ得スアノ態ハ何タ」（6月16日）[9]と，高射砲部隊に対軍不信の矛先が向けられた。これらの防空体制に対し，米軍は高射砲により6機が「軽妙な損害」を受け，戦闘機の迎撃と「不時着を合わせて7機と55名の人員を失った」と記録している。

大本営は来襲の敵機数について「二十機内外」とし，このうち制空部隊により7機が撃墜され，3機が撃破され，「制空部隊及地上軍事施設に殆ど損害なし」，「我方の損害は極めて軽微なり」と発表した。また，新聞報道で八幡製鉄は「若干の被弾があったが殆ど問題にならず」[10]と発表された。敵機数は過小に発表されたため「来襲敵機の五割を撃墜撃破するといふ赫々たる戦果あげ」と評価されていた[11]。大本営発表はこの点を除き，アメリカ側の記録とほぼ一致する内容となっている。

しかし，この空襲で攻撃目標が殆ど補捉できなかったということは，爆弾の大部分が他の市街地

に投弾されたことを意味する。今日となっては，確定的な被害の実数は明らかではないが，『北九州市史』によれば死者322，重症193，家屋全壊298，半倒壊348という数字が記されている[12]。既に，この時期，大本営発表に対する不信は徐々に高まりつつあり，「大シタ損害ハ無イト発表シテ居ルカ九州ヘ行クト何処ヘ行ツテモ毎日葬式ハカリタソウタ」といった流言が全国的に発生し，この空襲に関わる「憶測的造言多発シ全国的ニ一〇九件」となり，「憲兵ノ知得セル造言飛語ハ四四五件ニシテ先月（三九四件）ニ比シ五一件ノ増加」を示していた[13]。これら流言の中には単なる被害憶測や対軍不信を越え銃後に強い動揺を与えていたことを示しているものもあった。例えば，香川県坂出市では「敵カ高知県沿岸ニ上陸シテ現在激戦中デアル」という流言が，また，「銚子方面テハ十八日ノ警戒警報時付近ニ敵カ上陸シタトノ流言ノタメ十九日朝迄待避壕ニ這入ツテオツタ」[14]といった流言が発生していた。このため，例えば若松警察署（現北九州市）では市内五十カ所に次のような掲示を出した。「蠅ミタイナ敵機ニ恐レテ戦場ヲ逃ゲルノハ誰ダ。君ノ逃ゲル先ハ英国カ米国カ」，「当局発表以外ノコトヲ誇張シテ人ニ話シタリ，或ハコレニ拘ルコトヲ手紙ニ書イテ遣ルコトハ，敵ノ思想謀略ニ乗ゼラレ銃後錯乱シ自国ニ弓ヲ引ク様ナモノデ，厳重ニ処罰ヲ受ケル」[15]。このような防諜活動や言論統制のために罹災者はその困窮を訴えることすら出来ない状況となった。ある罹災者は「どこかの家にあかりがもれていたので，ここに爆弾が投下されたのだろう」と言われ，「一般の人々の目は，私たちには冷たかった」，「私達にとっては，日本人の一人一人の目，口が，最大の敵でした」と回想している[16]。しかし，このような相互監視は相互不信を募らせ，「重要都市ヲ爆撃ニ来タノハ工場ニ働イテ居ル工員中『スパイ』カ居テ工場ノ位置カ敵ニ判リ爆撃ニ来ルノテアル」[17]といったスパイに関する流言となった。特に，朝鮮人は「スパイ」の槍玉に上げられるようになる。既に，空襲の前から「爆撃カアルト半島人カ混乱スルカラ内地人カ鎮メル為半島人ヲ全部ヲ殺スカモ判ラン」（2月上旬）[18]といったことが言われていたのである。このため空襲後には「朝鮮人ハ八幡市ヲ全滅サセル為灯ヲツケタ侭自分等ハ待避シテ居タラシイ」，「今後其ノ様ナモノハ叩キ切ルト云フコトヲ聞イタ」[19]といった流言が記録された。

政府当局は本土空襲に至り，今後さらに悪化するであろう戦況に対し少しでも国民の動揺を押える対策を取らねばならなくなる。しかし，その一方で，戦況の推移について多少なりとも期待が持てるような材料を提供することもしなければならなかった。このため北九州爆撃についての解説記事は矛盾に満ちたものとなる。まず，「在支米空軍」は「わが荒鷲のため常に機先を制せられて打撃」を被っており[20]，今回の来襲は「わが支那戦線の非常な活発化に危機がぢりぢりと脚下に迫った敵陣営の窮余の反撃」[21]であると解説された。従って今回の敵の空襲の目的は「あくまで神経戦であり，世界宣伝戦である」[22]と強調された。しかし，他方，アメリカが狙いとする本土空襲は今回のような「ゲリラ的な小規模空襲の程度を遙かに絶した大規模空襲であることを念頭」[23]におかねばならないことが主張されるのである。本土空襲の可能性については，以前から科学戦についての記事で述べられてきたが，北九州爆撃，サイパンの米軍上陸後，アメリカ軍の爆撃機の性能についての記事が目立つようになる。例えば，6月17日付の朝日新聞では，タイトルこそ『苦心の長距離飛行　我が

本土を窺う敵空軍の悩み』とあるが，そこでB29の性能について「爆弾二トン積載した場合」，「行動半径2700キロ」であり，「爆撃四トン」の場合には「行動半径2200キロ」と述べられていた。この場合行動半径2200キロというのは，他でもないサイパンから本州までの距離に相当し，さらには「米海軍当局の言明によれば太平洋には六十隻の空母が就役」しており，「本土空襲も空母から実施される可能性は十分にある」と言うのである。いずれにせよ，国民が本土空襲を念頭におくようになったことは確かである。

III．サイパン政変

6月16日，大本営はサイパンにアメリカ軍が上陸を企図し「前後二回之を水際に撃退せり」，さらに「敵機動部隊小笠原諸島に来襲し父島及硫黄島を空襲せり」と発表した[24]。本土から1,000キロにも満たない小笠原諸島に艦載機が活動していることに「『一体日本の艦隊はどこにいるのだ』<中略>と新潮社で皆で話し合っている」[25]，「日本艦艇はどこにいる？……これが識者の疑問だ」[26]と考えたものは少なくなかったはずである。まさに，この頃，6月19日から20日にかけて，サイパン島沖で日米双方の艦隊決戦（マリアナ沖海戦）が行われていた。日本側の主力が空母9，戦艦7，巡洋艦14，艦載機439機であるのに対し，アメリカは空母15，戦艦7，巡洋艦21，艦載機891機と優勢であった。しかし，アメリカ側のパイロットの技量，軍事技術が日本のそれを上回っていたために，その差は数値以上のものとなった。戦闘後の双方の損害を比較して見ると，「日本側の沈没＝空母三など，中小破＝空母四，戦艦一，重巡一など，飛行機三九五機にたいし，アメリカ側は小破＝空母二，戦艦二，重巡一，飛行機一一七機にすぎなかった」[27]。

しかし，これらの実相は発表されなかった。これまで大本営発表は戦果を誇大に，損害を過小に発表して来たが，そうした傾向は戦況悪化と正比例の関係にあった。大本営は6月23日に日米双方の艦隊が接触したことを発表したが，決定的打撃を与えるに至っていない，とのみで詳細な発表を控えた。漸く7月1日に至りマリアナ方面の総合戦果が発表されることとなった。それによると撃沈が戦艦2，空母2，巡洋艦4，その他8，撃沈もしくは撃破が戦艦1，空母5，撃破が戦艦2，空母6，巡洋艦4，その他14，飛行機撃墜666機以上であり，損害は僅かに空母1，油槽船2，飛行機96とあった[28]。しかも，これらの発表の後には，見て来たようなまことしやかな戦記報告がなされるのである。「ある」記者は艦橋で目撃した対空戦闘を「敵機群は一瞬にして半数以上を撃墜され」とか，一昨年に比べ敵機の「攻撃技術闘志は遙かに低下している」と伝え，あるいは艦内で「『敵正式空母一隻命中』との入電」を聞いたといった具合である[29]。そして，この戦記は終わりに「全艦艇健在であるにも拘わらず一旦矛を納めねばならなかったのである，残余の敵機動部隊はなおマリアナ諸島近海に遊弋している」とコメントすることを忘れなかった。国民には，戦いに勝ってはいるが，敵はまだまだ居ると思わせなければならないからである。こうした情報操作は非常に効果的であり，「地方では，米艦隊を，おびき寄せて置いて，ガンと殲滅するのだと確信している」[30]のであった。

この海上戦闘の報道と比べると，サイパンの戦況は思わしくなかった。当初、新聞は「敵の腰（補給線の意）は既に伸び切った，時こそ今だ，この反攻を補足して之を殲滅し攻勢に転移すべき正に絶好の機会」[31]と国民に訴えていた。しかし，「在留民のうち多数の武器なき日本婦女子が皇軍に協力している」（6月28日）[32]，「アスリート飛行場には敵小型機数十機ならびに大型機若干が発着している」（7月2日）[33]とサイパンの地上戦を伝える報道は絶望的な展開となった。そして，7月10日には「ついにわが本土から二千余キロのサイパンに足かがりを作った」とし，B29なら「爆弾四トンを積んで六千キロ飛べるからサイパンからだと爆弾を五トンに増して来襲することも」ありうる，と報道するようになる[34]。このため，官憲記録には早くも6月24日，「サイパンハヤラレテ了ツタラシイテニヤンハ其レ以前ニ占領サレタラシイ」とする発言が登場し，「『サイパン島ハ玉砕セリ』ノ未発表戦況ニ関スル憶測的造言漸次多発ノ傾向」[35]となった。政府はこの対策として，サイパンから決別の電信を受けた7月7日，国民の戦意の動揺を防ぐため「戦局ノ現況ニ即応スル報道宣伝要領」[36]を決定した。そこでは，「国体護持国土防衛ノ為メ一億決死ノ覚悟ヲ以テ最後迄戦」い，「本土ガ戦場トナルベキコトヲ認識セシメ」，「戦争ノ勝敗ハ継戦意志ノ強弱」にあり，もし日本が敗れれば「東亜ハ再ビ米英ニ侵略搾取セラル」（下線筆者）との強調すべき四点が指導されていた。かくして，サイパンからの決別の電信に遅れること11日，「勇戦力闘敵に多大の損害を与え十六日迄に全員壮烈なる戦死を遂げたものと認む」，「在留邦人は始終軍に協力し凡そ戦い得るものは敢然戦闘に参加し概ね将兵と運命を共にせるものの如し」とサイパン玉砕の悲報が発表されたのである[37]。小長谷三郎はこの日，「皇国は敗くる筈はない。それは我等の絶対の信念である。」としながらも，今後，予想される本土空襲に対し「愈々死生観に徹す可き時が来た」とし，「本日以降の日記は自分の遺書である」[38]と述べる。産業報国会では，サイパン失陥後，職場大会の開催を指令し，「増産必勝の決意」と「勤労意欲の昂揚」をはかった。しかしながら，「斯る勤労意欲の昂揚は所謂衝動的範疇を出ず，従て一時的かつ興奮的にして永続性乏しく労務大衆の胸底には依然として生活問題を中心とする各種の不満焦慮を包蔵」[39]している状態にあった。このため，流言飛語は増大し当局をして「重大試練ニ直面セル大国民ノ襟度ヲ疑ハシムルモノアリ」と観察された。国民の個々の内面においても，聖戦意識と生活防衛の意識の一致は困難となっていた。

玉砕報道に際し，東条首相は談話を発表し「真の戦争はこれからである。一億決死の覚悟を新たにし」，「究極の勝利を獲得し，もって聖慮を安んじ奉むらん」と国民に訴えた[40]。また，鈴木貫太郎は「どうして今日の戦局に立ち至ったかを，われわれは十分考えて見なければならぬ」とし，その理由として「戦果に有頂天になり，それに酔ってしまって，各方面とも心に弛みが出て来ておりはしなかったか」，「心の持ち方が十分でなかったことによる」[41]と述べた。驚いたことに，国民への責任転嫁が公然と言われたのである。

サイパン玉砕報道の二日後，7月20日，東条内閣の総辞職が報道された。この東条という人物に対する国民の評価は二極化していたと言える。一方では人気を博していたかのようにも思われるし，他方，開戦以来，しばしばこの男に対する怨差が「反戦反軍不穏不敬発言」として記録されてきた。

そうした東条についての良からぬ風評のひとつに，例えば「かつて日本の女性の憎しみに満ちた嘲笑が蔣介石夫人――日本では宋美齢と発音していたが――に対しても向けられたことがあったが，いまや嘲笑は東条夫人に向けられ，人々は彼女を愚弄してひそかに東美齢と呼んでいた」[42]。このためサイパン玉砕の流言とほぼ時を同じくして「東条更迭」が巷間に囁かれるようになり，6月25日には「最近東条内閣カ更迭シ山下将軍カ梅津大将カ之ニ代ルノテハナイカト風評カアル」[43]と記録されている。伊藤整の日記でも7月3日からこの件が何回か登場し，14日には「内閣動揺説も巷間にしきりに流布されているらしい。この危機にのぞんで東条首相でもやめるようなことがあれば，国民の動揺は深刻なものとなるにちがいない。」[44]と強い危惧を抱いている。こうした民心動向に対処すべく，情報局は内閣総辞職の日に「内閣更迭ニ伴フ輿論指導方針」[45]を決定した。この方針で内閣の交替は「戦局ノ現段階ニ即応シ戦争ヲ一層強力ニ遂行スル為挙国一致，国内戦時体制ヲ飛躍的ニ強化スル」のが目的であり，「外国ニ於ケル指導者ノ更迭ト異ル」としている。そして，その報道については「人心ヲ一新スルニ主眼ヲ置キ徒ラニ既往ニ捉ハレザル様留意スルコト」と指導している。各紙の新聞報道もこれにならい「人心一新」の四文字が強調されていた。しかし，自らの日記を遺書とした小長谷三郎は，その僅か二日後の内閣総辞職に対し，「内閣総辞職とは何たる無責任ぞや。何たる弱腰であろう。戦局が不利なるが故に辞めたとあっては一億の風上にも置けぬ奴等だ。信頼出来ぬ指導者である」[46]と憤慨する。さらに流言記録では既に総辞職の発表前後から「実ハ昨日東条サンカコレヲヤツタラシイトノ話ヲ聞イタカ本当カネト手デ喉ヲ突ク真似ヲシ東条首相ノ自殺ヲ表現ス」（7月19日）[47]といった発言が多数確認出来る。これは当時の民衆が東条英機の責任を「切腹モノ」と考えていたからであろう[48]。清沢洌の日記にも，「投書なども沢山あり，刑事すらも，腹でも切れば許されるだろうが，オメオメ生きていれば殺されるかも知れないといった」[50]と記されている。次の「反戦不穏投書」はその典型である。「コラ英機ノ馬鹿野郎五十万ノ兵隊サンヲ殺シテオキナガラ其ノ結末ヲツケズニ大臣ヲヤメテオメオメ生キテイルノカ，何故軍人ラシク腹ヲ切ラヌカ中野正剛氏ヲ切腹セシメヤガツテオノレ生キル法ガアルカ　馬鹿野郎死ネ」[50]。

しかし，このような東条への反感の一方で，「一般民衆は東条の評判がいいとのこと。例の街に出て水戸黄門式のことをやるのがいいのだろう」[52]，「東条内閣総辞職。一般に再降下期待す。政治知識の欠乏を知る」[52]とあるように，東条内閣を支持する声が一般にあったことも事実である。「世論」が「流言飛語」として取締の対象になるようなものだけが，記録されているためにここだけを見ていると世論の圧倒多数が東条内閣に反感を持っていたかのような印象を受ける。勿論，流言記録とは言え，言論の自由がない状況下で内閣に対する反感を示す発言がこれだけ多数ある点は無視できない。しかし，今日にあっては敗戦後の「自決未遂」，「A級戦犯」といった東条のイメージが強いため，戦中の「東条人気」が忘れられがちである。戦中における東条に対する評価は，日本の戦争目的をどう評価していたか，社会統制の中でどんな立場にあったのか（これは単に利害の有無のみならず。判断材料となる政治情報の有無に係わる問題として），によって大きく異なってくる。伊藤整はこの内閣総辞職を「今政治家が変わったとて軍需生産が増加するわけでなく，むしろ低下するにちがい

ないのだし，敵に足もとを見すかされる」[53]としている。このように内閣に対する評価が戦争目的の支持を覆すことは，一般にはありえないことであった。小長谷三郎は，後継内閣に対し「大同小異，大して相違はあるまい。絶対信頼は出来ぬ」と強い不信を示すが，「天皇陛下の赤子たる我々国民は総理大臣等はさておき，天皇に忠節を尽くすを以て生きる道とし，死する道とするならば，如何なる事態に対するも平然自若とする事が出来る筈である（傍線筆者）」[54]と述べている。聖戦意識の下では政治一般に対する評価の位置付けが相対的に低くなり，これが「政治知識の欠乏」を再生産してゆくのである。

IV．小磯内閣とサイパン政変後の世論指導

東条内閣の後継には朝鮮総督の小磯国昭大将が就任することとなった。この新内閣については「米内大将ハ親米派デアリ小磯大将ハ親蘇派デアル関係ヨリシテ日本ハ近ク休戦センカ為テアラウ」[55]といった流言が一部に見られるが，これは民心の底流にある戦争終結願望が，もしくは厭戦意識が表面化したものであった。7月22日，内閣親任式後の記者会見で小磯は，決戦段階に対する根本方針を問われ次のように答える[56]。「結論としては戦意の昂揚と生産の増強である，すなわち精神的と物的の両面」であり，精神的には「皇国臣民はよく神意を体得し明朗濶達になること」とし，物的には「生活上必要の最低限度を確保しつつ官民共に協力すること」であり，そのために「国民を『大和一致』させる明朗濶達の雰囲気を作ること」が必要であるとした。小磯は『大和一致』という言葉を重視したが，その意味を問われると「一致団結，挙国一致というような言葉で十分なわけだが」，「最近の情勢はかゝる点に相当の欠陥が伏在すると考える故に特に大和という言葉を挿入した」と答えた。

この話の要点は代わり映えのない精神主義と，国民の団結に「相当の欠陥が伏在」していたことを認めたということであった。特に東条内閣の憲兵政治に対する反動から，小磯内閣に対しては「国民を信頼し国民の忠誠を信じ戦局のこと，政治のこと，その他すべてに亙り許される範囲においてその実相を知らせ，国民と共に談じ国民と共に語り，政府と国民と微塵の間隙もなく抱き合うことの出来る内閣」[57]が期待されてい。この点について，「小磯内閣となってから言論の明朗化が称道(マヽ)されて，新聞紙は批判に積極性を示し出したが，そうなると先ず，食生活に対する不足不満のみが表立ってくる」[58]ようになった。従って，ある程度こうした期待に答えようとしていた点を認めることもできるが，戦争継続内閣である以上，基本的な方針に変化があろうはずがない。八月五日，大本営政府連絡会議が廃止され，新たに最高戦争指導会議[59]が設けられたが，これは機構の改変というよりは改称に過ぎないものであった。政治に実質的な変化が乏しい中で，国民統合を図って行くためには「大和一致」だけでは無理があった。

国民の不満・批判，そして民心の底流にある厭戦・終戦願望を押さえ，戦争継続へ国民を統合するため，政府当局の世論指導は「国民を戦争のためにいっそう努力させるという文脈のなかで材料」を提供するようになり，この題材として「絶望的な状況を描いた『おどかし』物語」が新聞の紙面

に登場するようになった[60]。この「おどかし」物語の中でまず強調されたのがアメリカ人の残虐性であった。例えば，アメリカ兵が日本軍将兵の頭蓋骨等を記念品として国に送る話とか，戦場では日本の負傷兵が戦車で「ローラーで地ならしをするかのように押し潰」されたとか，「鉄条網で簀巻きにされ波打際に頭から杭のように埋められ」たと伝えられた[61]。また，特に反響を呼んだものに「米誌『ライフ』五月号に臆面もなく掲載」された写真で，記念品として送られた日本兵の骸骨を前に少女がその寄贈者にお礼の手紙を書こうとしている図であった[62]。こうした報道の要点は，アメリカ人が「男も女も残忍に陶酔」するような国民であり，「負ければ一億がペン軸」にされるということであった[63]。サイパン玉砕について「日本の宣伝が鳴物入りではやしたてた場面は，一般植民者，農園主，官吏等の市民層の間で起こった事態」[64]であった。当時，サイパンには43,000人の兵士と20,000人の非戦闘員がいた。後に「バンザイクリフ」という言葉と共に知れるようになる一般民間人の集団自決は，「一億決死ノ覚悟」を喚起する格好の材料として盛んに報道される。これらの悲劇は本土から2,000キロ離れた絶海の地で起きた事件であったが，情報局はアメリカの『タイム』8月7日号の記事を外電経由で新聞やラジオで紹介していた。朝日新聞[65]では『タイム』の記者が日本人非戦闘員の集団自決を「悲惨な自殺」と読んだことに対し，「われわれにとってはそれは断じて『死』ではない，『生』である，同胞の心情に宿り一億倍となってふき出すいのちである」と解説している。そして，タイムの記事の結びをそのまま，新聞記事の結びに引用する。「日本非戦闘員のこの自決こそ『日本人は全民族をあげて降伏よりも死を選ぶ』ということを表明しているのである」。このような脅し物語りに対し，「負けたら殺されるから勝たねばならないという指導は痴論だ。米英は夷だから撃滅するのだという方向で行かねばならない」[66]といった批判もあった。しかし，この「米鬼」の宣伝は民衆に徹底的に浸透していった。戦後，「日本が負けたら，あなたとあなたの家族どうなると思いましたか」という質問に対し，68%のものが「残虐行為，飢餓，奴隷化，全滅」と答えている[67]。政府は少なくとも，この「おどし」によって戦争継続を選択の余地のないものと認識させることに成功していた。

当時，銃後にはこのおどし物語りの一方で空襲の恐怖が切迫していた。既に空爆の標的とされた八幡市枝光大歳町では，8月20日，21日の空襲の後，「八月二十四日ニハ更ニ大編隊デ八幡市ニ爆撃ニ来ルト逮捕シタ捕虜ガ云ツタラシイ」との流言が広まり，このため二十四日夜，同町では「悉ク非難シ全町七十戸中残留者三戸ニ過キザリシ」状態となった[68]。東京にいた伊藤整ですら，「前々から言われていた内地の戦場化が，ここで現実のこととなって来た」とし，「国の運命そのものが不安に曝されている時に，その国土の中に安全な場所や安全な生活などが残り得るものではない。またそういうことを考えねばならぬ時に，財産とか生活の見とおしなど立つものではない。」[69]と記している。政府は，せめて学童をこの「安全な場所」に避難させるため6月30日，学童疎開を閣議決定し，8月4日，東京都からその第一陣が出発した。当時，「疎開児童ハ食料ガナイノデ蝗や蜻蛉ヲ生ノ侭食ヘテ居ルソウダ」[70]，「県民カ心ヲコメテ送ツタ品物ハ附添ノ先生カ其ノ大部分ヲ自分ノ家庭ニ送ツテイル相ダ」[71]といった流言があり，学童を送り出す親は疎開先の食糧事情に大きな不安を抱

いていた。実際，今日，残っている疎開学童の日記に共通する点は食べ物に関する記述が異様に多いという点である。多くの学童が毎日の献立を事細かに記している。ここにある疎開学童[72]とその父親[73]との手紙のやり取りを紹介しよう。

（8月28日）「おなかがすいてたまりませんから何か持って来て下さい」

（8月29日）「お金と豆とくさらないもの早く送って下さい」

（9月7日）「さつまいものふかしたのや色々なものは先生に見せないで僕に下さい」（傍線筆者）

こんな手紙を受け取っては親は心配でいたたまれないのだが，ところが，電車で会いに行くにしても軍用・公用以外では中々切符が手に入らない。この父親はその返事の中で精一杯の愛情を示すと共に軍国の父として次のように励ましている。

（9月21日）「小サイオ前達ガ頑張レバオ父サンヤ外ノ子供達ノオ父サンモ沢山働ケマス。皆ノオ父サンガ沢山働ケバ飛行機ヤ戦車ヤ大砲ガドンドン出来マス。ダカラオ前達モウント頑張リマショウ」。

疎開施策は，「最後の勝利」を信じて戦えと国民に訴えてきた当局にとって消極的で不本意な措置であった。しかも，応召，徴用，学徒勤労動員，女子挺身隊，そして学童疎開に至り，銃後の守りの要である「家」は解体を余儀なくされる。戦争継続は，もはや，大和一致どころか家の破壊要因そのものであった。

V．翼賛と隘路

当時，統制は随所に行き詰まりを示し，「一つのことをやろうとすると，他に差し障りがどこか出て来る。これを隘路だという。至るところ隘路だらけである。」[74]と表現されていた。この隘路は主に，1)特権的地位にいるものが統制に名を借り私利私欲を追求していること，2)行き届かない統制がむしろ生産を非効率にしていること，3)そして下意上通のシステムが機能していないことの3点に主に現れていた。勿論，根本的な問題としては総力戦体制による過度な負担が生活を逼迫している点があったが，当時の「隘路」という言葉は，国民の側の自発的な戦争強力の意志を阻害するという脈絡で用いられていた。

第一の傾向は，官吏や特権的な地位にいる人に対する民衆の不信感を深めていた。例えば，家屋税「四円」の未納から差押さえ手続きの通知を受けた伊藤整は，税務署の「吏員は差押えをしておいて，それとぐるになっている何人かに，目下闇値では大変な価格になっている土地つきで疎開向きで誰でもほしがっているこんな家を手に入れさせてやる，というような悪企みをしかねない」[75]と思ったという。統制の拡大は末端の官吏の利権領域を拡大し，職権濫用が頻々としていたのである。また，軍指定工場などは，しばしば，時局便乗の典型と見られ，当局は極端に「非時局的」な工場の幹部を懲罰的に摘発・更迭の措置を採ることがあった。その一人，東洋曹達岩瀬社長更迭に際しては「岩瀬社長ハ金庫ノ中ニ短波機ヲ備ヘ敵ノ潜水艦ト通信シテ居タノヲ検挙セラレ九月二十二日徳山ノ暁部隊デ銃殺サレルソウダ」，「銃殺当日ハ見物人ノ為切符ヲ無制限ニ売ルソウダ」といった

流言が「広島以西内海岸特ニ徳山宇部付近」で盛んに噂された。その結果，「岩瀬社長銃殺」の当日には「見物ノ為乗車セントシタ」者203名，「暁部隊営門前ニ見物」に来たもの約30名を数えるに至った[76]。これなどは当時の工場幹部が一般民にどれほど不信を買っていたかを如実に示している。

第2の点は，例えばある工場は航空機生産の転換工場となったが，「幹部係長級まで皆転業者の機屋さん。政策も，技術も。それで飛行機を作れ，管理工場になったから辞めさせないでは，ルーズベルトから勲章の来るのを当てにしているようなものだ」[77]。また，ある統制資材の会社では「甲資材に代わるべき乙資材が在庫するに係わらず，取扱者が技術上の経験知識浅いため，申請者に対し，乙資材を以て代替せよとの指導連絡もなし得ない例がある」[78]といった指摘に明らかなように，適切さを欠いた機構配置に起因するものであった。

第3の下意上通は，「農民から何事か不服を申入れても，末端の農業会長は町村長が兼務しておりますから握りつぶして上通致す(ママ)さない。その上に巡査と結託して彼は思想が赤いなどと言って伏せてしまう。民衆を代表して何か申すべき位置の人に慰労などの名で何がしかの金を送る故に，この人も亦口を噤みて言わず」[79]とあるように全く機能していない。そもそも，本稿で用いた民衆の発言の多くは当時の官憲資料によっており，当局は下意を充分に把握していたと言える。しかし，これらの民意は「流言飛語」の範疇としてしか扱われなかったのである。

政府は8月23日，学徒勤労令，女子挺身勤労令を勅令として公布した。当時，勤労学徒動員に赴いた青年の日記から，この隘路の実情をみてみることにしよう。斎藤実はその初日（7月31日），「何からしらはずむ心を抑えて，安立電器株式会社吉田工場の門を過ぎる。日に日に重大化するこの決戦下！我等学徒は動員令を受けて，当工場の援助に来たのだ」[80]と，勤労動員への決意を記している。しかし，職場は必ずしも彼等の期待に応えるものではなかった。当時，「最近職場配置の不適正，受入体制の不備等の諸問題を繞り一斉引揚，一般工員との感情的対立等の事案漸く増加の趨勢に在り，この情勢を以てすればやがては学徒を中心とする新たなる労働問題の発生が予見」[81]されるようになっていたからである。問題点は配置不適正，一般工員との対立に加え食糧不足の三点にあった。工場労働者はその軽重に応じて一般より多く主食が配給されていたが，勤労動員された学徒に対してもこの労働者並の配給をするというのが加配米であった。しかし，運用は「加配米は渡っていることになっているのだが，配給所から工場に来ていない。配給所へ行くとまだその米は到着していない」[82]という状態であった。このため学生から当局へ「日に六合も食べている人達と一緒に働いていながら，二合三勺で通せとは無理ではないか。」[83]という声が寄せられていた。斎藤実の日記においても，「近ごろ遅く来る者が非常に増えた。ふだんとあまり時間に差もなく，電車も大して混むわけでもないから，もっと早く来られると思う」[84]と，僅か20日後にして，学徒の勤労意欲に陰りが生じていたことを記している。また，学徒と一般工員との対立について，「我ら学徒にのみ，石鹸の配給があったことを聞いた工員は今日，これについて色々大騒ぎをし，『なぜ学徒にのみ配給するか』」と工場側に詰め寄った，とある。これについて斎藤は「『現に学徒の方が工員よりも働いているではないか』とか，『学徒は僅かな報奨金だけで，一生懸命働いているではないか』」[85]と反論している。

一般に国家による労働動員は，その名誉を建前に底賃金を労働者に強制していた。それでも一般に勤労学徒は他の一般労働者と比較すると，勤労意欲が高かったという事が言えるかもしれない。学校という組織ごと動員されていたこともその理由の一つであろうが，何よりも一般の労働者や徴用者はより現実的な選択を積極的に採っていたからでる。例えば徴用労働者の場合，「職場を軽視して高賃あさりに狂奔，表面は病気だがその実は職場を転々として闇働きをする」ものが増え[86]，横浜市域だけでも「最近では三千余名を数えるに至ったので＜中略＞約五百名を検挙」[87]するという事態になっていたのである。また，川崎市鶴見区では町内会で婦人を勤労報国隊として組織し，「勤労動員署の指令を受けて指定の職場に所要の労力を出動」させていたが，「労働供給業者が高い賃金を餌にして隊員に働きかけるので隊員の足並みが乱れ」，東芝のある工場では「遂に全滅」してしまった[88]。この「職場の軽視」の背景には「勤報隊として行くと一日一円五十銭前後」であるのに対し，労力供給業者の紹介する工場では「働く時間が同じで一日四円五十銭から五円五十銭支給される」[89]からである。これなどを見ると徴用や学徒勤労動員といったものが，国家権力に名を借りた不当な収奪であったことがよく解る。これに対して尽忠愛国の念に燃える青年学徒層においては，底賃金を甘受する一方で，軍指定工場の私企業的な性格を極度に嫌うという面を持っていた。このため，「総厥起大会でも学生達は，その宣誓をする時に，工場主に対してするというようなことは絶対にしたがらず，各引率の教員が壇上に立ってその宣誓を受けることにしたという。また彼等の実技を指導している職長とか班長とかいう工員たちが無学であるため，生徒達に馬鹿にされ，実に扱いにくい」[90]のであった。

それでも，斎藤実は「お国の為に尽くしたいのです。然るにそこには多くの隘路が横たわっています。即ち機械，道具等の不足，工員との関係等いろいろとあります。茲に於て，自分の切にお願いするのは，工場幹部の人々が我等学徒の実力を認め，我々に豊富なる仕事を与えて下さらんことであります」[91]と訴える。隘路は「自発的な戦争協力の意志を阻害する」ものでこそあれ，戦争協力の意志を挫くものではなかった。この翼賛と勝利か滅亡以外に戦争終結はないという認識が，戦争継続を支えた力であった。

VI. 決戦輿論指導方策と台湾沖航空戦

10月1日，大本営は大宮島（グァム），テニアンの玉砕を発表した。サイパン同様，ここでも「全在留同胞共に散華」，「婦女子も自決」といったことが日本人のあるべき姿として伝えられる[92]。小長谷三郎は「勝敗は問題ではない。天に代わりて不義を打つ。皇軍が何で洋鬼に負ける筈がある。世界の中心，人類の中心，天皇を戴く日の民が天の御都合に依って洋鬼を撃つのである」[93]と，ここに至り精神主義への傾斜を一層深める。

10月6日，政府は「決戦輿論指導方策要綱」[94]を閣議決定したが，その方針は精神主義や「神がかり」の領域を出るものではなかった。重視すべき7項目として「(1)国体ニ対スル信仰ノ喚起昂揚」，「(2)宣戦ノ大詔ノ御趣旨ノ徹底」，「(3)決戦的戦局認識ノ徹底」，「(4)究極ニ於ケル必勝確信ノ具体的基

礎ノ明示」,「(5)敵ニ対スル敵愾心ノ激成」,「(6)敵国内情ノ苦境ノ暴露」,「(7)決戦的戦時生活下ニ於ケル気分ノ明朗化」をあげる。いずれも観念的な内容ばかりであり，唯一「具体的基礎ノ明示」を言う(4)の「究極ニ於ケル必勝確信」を見てみても,「粘リ強ク戦ヒ続ケタル国ガ紙一重ノ差ニテ勝ツ所以」として「我ニ天祐神助アリ」,「大和魂ヲ以テ戦フ時ハ必ズ敵ヲ破リ得ル」等々とおおよそ具体性もなく精神主義一色である。こうした非合理主義に「この決戦の時期に町内の竹槍訓練でもあるまい。兵器原料の供出にでもこの時間を当つべきだ」[95],「郷軍は防衛に立つと云うは良いが，月三回，一の日に暁天動員するのだと云う。朝早く起きれば幾台の飛行機ができるのかと聞きたい」[96]と批判の声が多かった。この精神主義の一方で,「この頃新聞の論調には，科学思想尊重の風が顕著である。神がかり的な精神主義があまりに尊重されて来た近年の風潮への反発が，科学戦の様相の深刻化とともに表面に出て来たのだ」[97]とあり，サイパン失陥後，政府の輿論指導は支離滅裂の展開となっていた。

こうした中，台湾沖航空戦とフィリピン沖海戦の「大戦果」は，一時的であれ銃後に戦意昂揚と政府への信頼の回復をもたらした。10月9日，大本営は台湾沖航空戦の戦果を撃沈空母11，戦艦2，巡洋艦3，駆逐艦1，撃破空母8，戦艦2と発表した。しかし，実際は大破巡洋艦2，小破空母2，巡洋艦1，駆逐艦1に過ぎず大戦果ならぬ大誤報であった[98]。さらに，10月26日，大本営はフィリピン沖海戦の戦果を撃沈空母8，巡洋艦3と発表した。これも実際は撃沈小型空母1，護衛空母2，駆逐艦3，魚雷艇1，潜水艦1に過ぎなかった[99]。しかも，連合艦隊は空母4，戦艦3，巡洋艦9，駆逐艦8，潜水艦6の艦艇を失い，事実上，壊滅していた。しかし，銃後ではこの実態を知る由もない。斎藤実は台湾沖航空戦について「久し振りの海軍部隊の大戦果発表に，電車に乗っている人々の顔は皆生々としている」[100]と記し，村野良一も「台湾沖海空戦大戦果でお正月のような気分がする。秋の宵の酒は一入うまい」[101]と喜びを記している。新宿の伊勢丹には「六尺四方ぐらいの日本画に，敵航空母艦群の沈没の様」を描いた絵が飾られ,「何人もの人が足を止めてそれを見ている。一人の青年が『気持ちがいいな』とひとりごとを言いながらそれを見ている。ああ国民全体が喜んでいるという感激をひしひしと私は受けた」[102]と，当時の喜びを伊藤整も描写しているのである。引き続くフィリピン沖海戦の発表でも「又々上がった海軍部隊の大戦果，工場内は沸き立つばかりの感激で一杯」[103]と手放しである。こうした銃後の感激も，一重にその労苦が大きかったこそであり，サイパン失陥以降，当局から言われ続けて来た,「敵の物量」に対する「増産必勝」がその成果となって現れたことを実感したからに他ならない。東京都府中町の町議会では「産業戦士並ニ食料増産戦士ニ贈呈大戦果感謝文」を決議したが，その文面からはこの事情をよく読み取ることが出来る[104]。

「『敵の誇る物量のせめてその三分の一でも』と叫ぶその悲痛な前線の声に応えて敢然として起きあがったのは，ああそれはあなた方食糧増産戦士産業戦士の皆様，学徒報国隊の皆様，あなが方でした。祖先の業を捨て教科書を伏せ，あるいは愛児を乳房から離し脂粉を忘れ真に一身一家を擲って職場に馳せ参じ夜を日に継いでの御苦労御奮闘は全く『銃後も戦場』の合言葉をそのままに顕現したものでありました」。

これらの大戦果の中でわけても強調されたのが「神風特別攻撃隊」であった。その出撃の様子はニュース映画とされ,「真に日本人なら血涙を絞る大熱編」[105]であり，国民に大きな感動を与えるものであった。政府はこの特攻精神に銃後も続けと,「神風大戦果の隣組国債貯金」を実施し，そして，隘路の克服に，しばしば，この「特攻精神」を振りかざすようになる。これについて小長谷三郎は,「公務の為に生命を捧げ得る者は，悠久の大義に生きる事が出来るのだ。しかして天皇陛下の御前にて討死出来得るものである。日本国民としてこれ以上の善はあるまい」[106]と述べる。尽忠愛国の念に溢れるばかりの若さを読み取ることが出来よう。鉄道職員であった彼は「鉄路を死守」することを誓うのである。しかし，銃後を支えていたのは若者だけではない。これにつき村野良一は異なる視点を持っていた。すなわち,「かかる時代にこそ人生観に徹するを要す。神風挺身隊の勇士は一時的に皇国に殉ずるの精神を得るが，我等は年歯(ママ)若さからざれば，一応古き桎梏を清算し然る後新しき時代精神を得んとするのみ。口舌のみの指導者には解するを得ざるべし」[107]。おそらく当時の国民の大部分にとって,「決死」は最高の「善」でこそあれ,「必死」には「一時的」「精神」によらなければ従容とすることが出来なかったに違いない。本土空襲の本格化を前に，国民の戦況と自らの運命に寄せる思いは一段と悲愴なものとなった。

むすびにかえて

政府は聖戦完遂の下に国民統合を図るため「大和一致」といった皇国イデオロギーを世論指導の柱としていた。しかし，その一方，戦争は科学戦，物量戦の様相を一層深め，戦争に勝つための要件として合理主義を完全に否定することは出来なかった。「神風特別攻撃隊」はこの精神主義と合理主義の狭間で,「最後ノ勝利」への国民的迷信を支えたのである。しかし，連合艦隊は既に壊滅的打撃を受け，前線では玉砕と特攻による「悲惨な自殺史」を繰り返し，敗退の中ですら皇軍によるアジア・太平洋地域での住民虐殺は止まることがなかった。この日本の戦争能力を挫き，戦意を減少させ，精神主義を打破したのが，科学と物量による空からの支配である。11月21日，マリアナ基地に進出していたB29は118機を数え，愈々，東京空爆は目前に迫る。当時，悪天候により出撃が延長された時，アメリカのパイロット達はB29を「飛び立つことのない最良の飛行機」と呼んだという[108]。数日の命拾いの後，110機のB29が東京上空を目指しサイパンを離陸したのは11月24日のことであった。

注記

1) 拙稿「太平洋戦争における戦意動揺期の民衆意識」,『明治大学大学院紀要』(1993.2)，頁69-82。
2)『朝日新聞』1944年5月26日。
3) 憲兵司令部「五月中ニ於ケル造言飛語」，南博編『近代庶民生活誌④流言』三一書房（1985)。
4) 放送の内容は『朝日新聞』1944年5月27日に掲載されている。
5) 清沢洌『暗黒日記』評論社（1981)，1944年5月15日。
6) 大本営発表6月16日，各紙17日報道。

7) 防衛庁戦史室『本土防空作戦』朝雲新聞社（1968），頁304-7。同日の日米の作戦の実際はすべて同書を参考とした。
8) 空襲戦災を記録する会九州連絡会『日本の空襲一八　九州』三省堂（1980），巻末の年表より。
9) 憲兵司令部「六月中ニ於ケル造言飛語」，前掲『近代庶民生活誌』。処置に「懲役二年求刑」とある。
10)『朝日新聞』6月17日。
11)『読売新聞』6月17日。
12)『北九州市史近代・現代　行政社会』北九州市編さん委員会（1987），頁674-5。
13) 前掲「六月中ニ於ケル造言飛語」。
14) 同上。
15)『若松市史第二集』。
16) 前掲「日本の空襲八　九州」三省堂（1980），頁29-30。
17) 前掲「六月中ニ於ケル造言飛語」。
18) 前掲「五月中ニ於ケル造言飛語」。
19) 前掲「六月中ニ於ケル造言飛語」。
20)『朝日新聞』6月18日。
21)『朝日新聞』6月17日。
22) 20)に同じ。
23) 同上。
24)『朝日新聞』6月17日。
25) 伊藤整『太平洋戦争日記（三）』新潮社（1983），6月19日。
26) 前掲『暗黒日記』，6月19日。
27) マリアナ沖海戦についての数値は，木坂順一郎『昭和の歴史7　太平洋戦争』小学館（1989），頁326-7を参照。
28)『朝日新聞』7月2日。
29)『西日本新聞』7月4日。
30) 前掲『暗黒日記』，7月8日。
31)『朝日新聞』6月17日。
32)『朝日新聞』。
33) 同上。
34) 同上。
35) 前掲，憲兵司令部「六月中ニ於ケル造言飛語」
36)『資料日本現代史第13巻』，頁202。
37)『朝日新聞』7月19日，大本営発表7月18日。
38)「小長谷三郎日記」7月18日付，『横浜の空襲と戦災　2』，頁54。
39)『特高月報昭和十九年七月分』。
40)『朝日新聞』7月19日。
41) 同上。
42) 前掲，『日本人と戦争』，頁160～79，「東条『新幕府』」より。
43) 前掲「六月中ニ於ケル造言飛語　憲兵司令部」，頁105。中島飛行機荻窪製作所の「某技師」が「憲兵ニ好意的ニ洩ス」とあり，処置に「他言セサル様警告ス　出所究明中」とある。
44) 伊藤整『太平洋戦争日記（三）』。
45) 前掲『資料日本現代史第十三巻』，頁202。
46) 前掲「小長谷三郎日記」。
47) 前掲「七月中ニ於ケル造言飛語　憲兵司令部」，頁105。「飲食店ニテ『ビール』ヲ飲ムベク行列中聞知セル」とあり，処置に「憲兵厳諭始末書ヲ徴ス」とある。
48) 憲兵司令部「九月中ニ於ケル造言飛語」によれば，七月中に察知したことの種の流言（東条首相ハ，憲兵ヲ GPU

ノ様ニ用イタ，殺サレタ，家ヲ焼カレタ，切腹シタ，金ヲ沢山貯メテ取調ヲ受ケテイル）は，全国で32件に及ぶ。

49) 前掲『暗黒日記』，7月20日。

50)『特高月報昭和十九年八月分』，頁33，「尾道郵便局に於いて尾道市市堂町三五二米喰糞太郎発信名，東条首相宛官製ハガキに青インクにて」とあり，その郵送を停止したとある。

51) 前掲『暗黒日記』7月22日。

52)「村野良一日記」7月20日，八王子市郷土資料館『八王子の空襲と戦災の記録　市民の記録編』(1985)。村野は当時38才のインテリ郵便局長。日記から私信等に目を通していたと思われる。

53) 前掲，『太平洋戦争日記』，7月20日。

54) 前掲「小長谷三郎日記」，7月20日。

55) 憲兵司令部「八月中ニ於ケル造言飛語」。

56)『朝日新聞』7月23日。

57)『朝日新聞』7月21日。

58) 伊藤整『太平洋戦争日記』8月14日。

59) 首相，外相，陸相，海相，参謀総長，軍令部総長により構成。

60) アメリカ戦略爆撃団調査報告「戦略爆撃が日本人の戦意におよびした効果」，前掲『横浜の空襲と戦災　第4巻』，281頁。

61)『朝日新聞』8月14日。

62)『朝日新聞』8月11日。記事によると「写真はベルリン電送」と説明されている。なお，この写真は『LIFE』1944年5月22日号，35頁に「PICTURE OF THE WEEK」として掲載されている。解説記事には「昨週，ナタリーは彼とその友人，13名の署名の入った頭蓋骨を受け取った。頭蓋骨には『これはニューギニアの海岸で拾った死骸で，良いジャップだ』と書かれていた。ナタリーは東条と名付けられた贈り物に驚いた。陸軍当局はこの種のことをかたく禁止している」。

63) 61)と同じ。ルーズベルト大統領に日本兵の骨を削って作ったペン軸が贈られた，ということが，当時，報道されていた。

64) ロベール・ギラン『日本人と戦争』，頁232。

65)『朝日新聞』，8月19日。

66) 前掲，『週間輿論報告』。『東京大空襲・戦災誌第五巻』。

67) アメリカ戦略爆撃調査団「国民全体としての戦意の変化」，前掲『東京大空襲第5巻』，409頁。他は10%が「どんなことがおこる知らなかった」，9%が「敗戦を予期しなかった」，4%が「よい取り扱い」，「その他」が5%，「無回答」が4%。

68) 前掲，憲兵司令部「八月中ニ於ケル造言飛語」。

69) 伊藤整『太平洋戦争日記』8月10日。

70) 前掲，憲兵司令部「十月中ニ於ケル造言飛語」。

71) 前掲，憲兵司令部「十月中ニ於ケル造言飛語」。

72)「小松茂生手紙」，『横浜の空襲と戦災第二巻』，頁137。

73)「小松保輔手紙」，同上書，頁140～1。

74)『朝日新聞』6月23日，「社説」。

75) 前掲『太平洋戦争日記』9月23日。

76) 前掲，憲兵司令部「九月中ニ於ケル造言飛語」。

77) 前掲，内閣情報局「週間輿論報告　第十九号」。

78) 同上。

79) 同上。

80)「斎藤実日記」，『横浜の空襲と戦災第二巻』，頁146～7。

81)『特高月報　昭和十九年七月分』。

82) 前掲『太平洋戦争日記』8月31日。

83) 内閣情報局「週間輿論報告　第十九号」(昭和19年９月),『東京大空襲戦災誌第五巻』, 頁306。「週間輿論報告」は『週報』の投書欄「通風塔」によせられたものを編集したもの。なお, 同報告書の所蔵は今のところ『東京大空襲』中の第十九号のみである。
84) 前掲「斎藤実日記」, ８月18日。
85) 前掲「斎藤実日記」, 11月19日。この石鹸の配給は工場からではなく県から学徒に対して行われた。
86)『神奈川新聞』７月13日。
87)『毎日新聞』(神奈川版) ８月30日。
88)『神奈川新聞』10月９日。
89) 同上。
90) 前掲『太平洋戦争日記』11月19日。
91) 前掲「斎藤実日記」, 11月21日。
92)『朝日新聞』10月１日
93) 前掲「小長谷三郎日記」, 10月２日
94) 前掲「資料日本現代史　第13巻」, 180頁。
95) 前掲,『週間輿論報告』。
96) 前掲「村野良一日記」, ９月３日。
97) 伊藤整『太平洋戦争日記』10月１日。
98) 木坂順一郎『昭和の歴史　７』小学館 (1989), 346頁。大誤報の原因は「夕暮れや夜間の戦闘が多く, 技量の未熟な搭乗員が戦果の判断を誤った」ためであった。海軍はその後の索敵で誤報に気付いていた。
99) 同上。
100) 前掲,「斎藤実日記」, 10月16日。
101) 前掲「村野良一日記」, 10月17日。
102) 前掲『太平洋戦争日記』10月18日。
103) 前掲,「斎藤実日記」10月26日。
104) 府中市史編纂委員会編『府中市の近代行政資料(5)』(1973), 255頁
105) 前掲「小長谷三郎日記」, 11月17日。
106) 同上, 11月２日。
107) 前掲「村野良一日記」11月22日。
108) 7) に同じ。